

ICU HS / SGH プログラム総括

グローバルリーダー育成
グローバル市民となる

高大
連携

文理バランス 帰国生教育
教科の枠を超えた総合学習



① SGH課題研究講座
グループワーク

課題研究
プレゼンテーション
発信

NEXT STEP

カリキュラムの開発

② SGH学習発表会
全校・全教員

研究
プレゼンテーション
発信

生徒たちがどのように
変わったか？

成果

教科の枠を超えた
コラボレーション。
情報シェア。
若い教員を育てる。

生徒たちが自分を知る。
他者を受け入れる、
受け入れられる。

③ 課題研究スタディツアー

エチオピア

ベトナム

アジア学院

オーストラリア

コロンビア大学

GLBC

SGLI

④ SGH 講演会 国際理解

全校・全教員

本物に
触れる

アンケート

土台、個人の学び
(リベラルアーツへの招待)

⑤ グローバルスタディネットワークの設立

成果

ネットワークができた。



大学 < 高大連携 >
ICU / 外語大 /
スタンフォード / コロンビア

外務省

企業

JICA

JICUF

AFICS

ロータリー/
AFS

同窓生

他校

(別紙様式3)

平成31年3月29日

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住 所 東京都三鷹市大沢3-10-2
管理機関名 学校法人国際基督教大学
代表者名 理事長 北城恪太郎 印

平成30年度スーパーグローバルハイスクールに係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

平成30年4月2日(契約締結日)～平成31年3月29日

2 指定校名

学 校 名 国際基督教大学高等学校

学校長名 中村 一郎

3 研究開発名

『帰国生と国内生の相互理解教育に基づくグローバルリーダー育成』

4 研究開発概要

SGH5年目となる今年度も、プログラムの中核は3年生53名が履修する「SGH課題研究講座」およびそこにおける学びの成果を全校に普及するためのSGH学習発表会であった。

課題研究講座においては、「多文化共生を目指す社会貢献」をテーマとして、帰国生徒と一般生徒が共にグループに分かれて探究を進めた。本講座は昨年度より、JICA(独立行政法人国際協力機構)との協力講座として開講されている。本校地歴公民科教諭を担当者とし、東京学芸大学ダッタ・シャミ准教授を教育顧問に迎え、問い、リサーチ、プレゼンテーションを重層的に試みながら、多文化共生を目指す社会貢献を追究した。さらに、本校全体でその成果を共有するため全校(762名)でSGH学習発表

会を開催した。

SGH 学習発表会では、第一部として課題研究講座の発表を全体で共有した。続いて第二部として、グローバル体験学習として実施された国内外スタディツアーなどのプレゼンテーションが行われた。また、平成 26 年度以来の SGH プログラム展開の波及効果として、個人で多様な国内外プログラムに積極的に参加する生徒も増えてきたため、彼らの体験も全校で共有できる場としてこの機会を用いた。第二部の会場は個別の教室とし、各生徒が興味関心に従ってプレゼンテーションを選択し、学びを第三部として各自のホームルームのグループで報告しあうという形式をとった。全校生徒が発信する経験と聞く経験と受けとめ交流しあう経験を、同時に三重に行う形式とした。

SGH 講演会「リベラルアーツへの招待」や各教科における主体的・対話的で深い学びなどが互いに奏功して、生徒の主体性を重んじた活動の中でグローバルリーダーの育成につながる教育プログラムが実施できている。

5 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
法人理事会 および 高校運営会議	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○
評議員会 高校委員会						○					○	
高大連絡会議		○		○				○	○		○	
SGH 運営 指導委員会						○						○

(2) 実績の説明

* 指定校に対する支援

管理機関は、理事会における校長による SGH 事業の進捗状況報告を通して、同事業の重要性と継続的な支援の必要性への理解を深めた。運営指導委員会には法人理事、法人事務局長が陪席し、運営指導委員会の指導助言を受けながら法人として適切な支援を継続している。

* 事業の管理

- ① 法人理事会および高校運営会議は、校長（法人理事）により随時事業の進捗状況の報告を受け、指導・助言をした。
- ② 法人評議員会高校委員会が年 2 回開催され、高校全般の運営等について審議する中で、SGH 事業の報告に対し適切な指導助言を行った。
- ③ 適宜、高大連絡会議を開催し、大学側担当者と高等学校側担当者との協議を行って SGH 事業の推進を図った。
- ④ SGH 運営指導委員会を年 2 回開催し、委員による指導・助言をいただいた。

運営指導委員会委員：

小尾晋之介 慶応義塾大学理工学部教授（委員長）

早水 研 公益財団法人日本ユニセフ協会 専務理事

廣田 光司 一般財団法人千葉 YMCA 総主事

和田 雅史 静岡産業大学経営学部教授

第9回指導委員会

日時 2018年9月7日（金）午前10時00分～午前11時40分 出席者11名

第10回指導委員会

日時 2019年3月1日（金）午前10時00分～午前11時55分 出席者11名

6 研究開発の実績

（1）実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
リベラルアーツへの招待				○	○				○	○	○	
SGH課題研究講座	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
活動報告会 学習発表会								○				
課題研究スタ ディーツアー				○	○							○
国際理解・国際 交流			○	○		○	○				○	○

（2）実績の説明

A；リベラルアーツへの招待 「世界を良くする多様なアプローチ」

1) SGH 講演会（学年単位・全員参加）

7月14日 1年生全員対象 公益財団法人 日本ユニセフ協会学校事業部 鈴木有紀子様

7月14日 2年生・3年生全員対象 国際基督教大学 特別招聘教授 吉川元偉教授

12月20日 1年生全員対象 東京理科大学理学部 宮武 久佳教授

12月20日 2年生全員対象 東京外国語大学大学院生 ミリアム アザール様

12月20日 3年生全員対象 外務省 国際協力局開発協力企画室 首席事務官 松浦 直子様

【2019年】

1月8日 1年生全員対象 JICA 企画部 国際援助協調企画室長 井本佐智子様

1月8日 2年生全員対象 杏林大学医学部医学部 櫻井 裕之教授

2) SGH 夏の数学ツアー 参加生徒11名 担当 石川教諭

8月17日 国立天文台訪問

3) 国際基督教大学教養学部冬学期コース聴講

19 講座のべ 147 名参加 2019 年 1 月～2 月

進路が決定した 3 年生に、国際基督教大学教養学部の講義を聴講する機会として設定。

4) ハーバードビジネススクール竹内弘高教授講演会「世界に羽ばたく若者へ」

2019 年 1 月 19 日 ICU (大学) ディップフェンドルファー記念館オーディトリウム

ICU で過ごされた学生時代から、世界の舞台で活躍するまでの経験とともに、ハーバードビジネススクールの現場、授業内容についてお話いただいた。日本と世界の架け橋である竹内教授から、ICU 高校生へのメッセージや思いが込められた特別な講演であり、自由参加であるにもかかわらず、200 名を超える生徒と保護者で会場があふれた。

B ; 課題研究講座

1) SGH 課題研究講座

3 年生科目選択者 53 名 (3 年生の約五分之一)

授業は 29 回にわたり大学教員や JICA 職員・JICA 研修生らの講義、留学生との対話などをはさみながら「多文化共生を目指す社会貢献」について、リサーチ、ディスカッションののち学習発表会におけるプレゼンテーションでその成果を発表した。

本講座は 2017 年度より、JICA (独立行政法人 国際協力機構) との協力講座として開講している。本講座の掲げる「多文化共生を目指す社会貢献」というテーマが、JICA の掲げる国際協力における「グローバル人材の育成」「地域パートナーシップの発掘」などの目標と重なる点を見出したことから、協力関係構築の実現に至った。今年度は、JICA 職員や JICA 研修生による講演、8 月 6 日外務省訪問、などの機会を持つことができた。本講座履修生の一部が、12 月 15 日に開催された 2018 年度 SGH 全国高校生フォーラムに出場した。

リサーチやプレゼンテーションの技法を東京学芸大学ダッタ・シャミ (Datta Shammi) 准教授 (本校教育顧問) に指導いただきながら、年度の後半は、リサーチ・プレゼンテーションと「会いたいプロジェクト」へと履修生の学びは収斂していった。「会いたいプロジェクト」においては履修生の情熱により作家の重松清さん「これからの人間関係」、フォトグラファーの佐藤健寿さん「世界の知られざる文化や遺産」の講演会を実施することができた。

全ての成果は、次項の SGH 学習発表会で披露された。

2) SGH 学習発表会

課題研究講座のまとめおよび学内外におけるさまざまなプログラムの発表として以下の学習発表会が行われた。当日は、SGH の指定を受けていない近隣他校からも見学者を迎え、本校 SGH 事業の成果の普及の機会となった。

日時 ; 2018 年 11 月 28 日水曜日

会場；国際基督教大学高等学校 体育館および普通教室など

参加者；全学年生徒 762名 教職員 47名 学外参加者・来賓 17名

【第1部】SGH 課題研究講座 「多文化共生を目指す社会貢献」発表

活動報告、会いたいプロジェクト

研究報告「データリネサンス」「SOGI」「難民高校生」「Challenging our traditional notions of identity and “home”」「ジェンダーステレオタイプにとらわれない社会へ」

【第2部】 各スタディツアー及び個人活動の報告と発信（プレゼンテーション）

20-30名程度の小グループに分かれ、それぞれの報告をふまえ質疑応答や意見の交換を行った。

① SGH 関連スタディツアー参加報告

コロンビア大学スタディツアー ベトナムスタディツアー オーストラリア学校体験入学&ホームステイプログラム GLBC アジア学院 SGLI 数学ツアー ペーパーレス・プロジェクト 選書ツアー 留学生（マレーシア・フランス） エチオピアスタディツアー(3月下旬実施予定)

② 個人活動報告

how to 課外活動 World Scholar's Cup 国際協力ボランティア（フィジー・北京） 授業発表（DRAMA） キャリア甲子園2017 タイ・サイエンス・スタディツアー HLAB

③ 外部関連団体レクチャー

オリンピック（アーチェリー連盟） JICA 留学生（フィジー・ケニア・エジプト・リビア） ロータリー留学生（アメリカ・イタリア・スーダン）

【第3部】 報告会

ホームルーム教室にもどり、それぞれが参加したプレゼンテーションの内容に関する報告をグループに分かれ行った。最後に振り返りシートの記入を行った。

3) SGH 事業による課題研究スタディツアー

① アジア学院スタディツアー 7月18日(水)～7月20日(金) 栃木県那須

参加生徒 18名 引率：安川教諭 農業体験 留学生交流

② ベトナムスタディツアー 7月26日(木)～8月2日(木) ベトナム フェ ホーチミン

参加生徒 20名 引率：黒澤教諭 吉里教諭

孤児施設訪問奉仕活動 現地学校交流 少数民族訪問 戦争遺跡見学

③ Global Leadership Boot Camp（問題解決セミナー）八王子セミナーハウスにて

8月27日(月)～8月29日(水)

参加生徒 17名 引率：松坂教諭 金子教諭 長谷川教諭 池邊教諭 小川教諭

3月29日(金)～31日(日)

参加生徒 22名 引率：松坂教諭 金子教諭 小川教諭 鵜飼教諭

与えられた課題を解決するためのノウハウを体験的に学ぶ

④ Columbia University スタディツアー 7月29日(日)～8月6日(月)

米国 コロンビア大学 参加生徒4名

すべて英語によるプログラム、コロンビア大学教員による正式プログラム講義受講

⑤エチオピアスタディツアー

2019年3月24日(日)～31日(日) エチオピア アジスアベバ 参加生徒13名

引率：Ellis 教諭・渡辺教諭 看護師同行

現地学校交流 国際機関訪問 NGO・現地企業訪問など

4) 課題研究の準備としての国際理解・国際交流

①キリスト教週間マルチイベント 6月6日(水)

全校行事であるキリスト教週間においてマルチイベントが実施された。国際理解や多文化共生(世界の子どもたちの教育支援、国連機関で働く面白さとやりがい、少数民族の言語を研究する：マリ語、中東・インドの音楽と料理を楽しむ、LGBT)等についての20のワークショップが開かれ、生徒は希望のプログラムを選んで参加した。

②1年生総合学習

1年生「総合的な学習の時間」では、「国際理解」をテーマとして、学校祭9月21日、22日にクラス参加することになっている。本年度は生徒それぞれの異文化体験を生かした演劇を共同制作し、発表した。事後に振り返りのレポートを作成した。

③ インターナショナルデー

2019年2月20日(水)に、生徒会主催により生徒が異文化に触れる機会としてインターナショナルデーの催しを開いた。本年度は、文化紹介やスタディツアー報告のブース展示を生徒が自主的に開いた。

④ 香港の中高校生との交流

2019年3月15日(金)に、香港のDiocesan Boys' Schoolの生徒10名と教員2名を迎え、交流を行った。ICU(大学)訪問の折に、本校にも立ち寄っていただいたものである。生徒会役員を中心に、プレゼンテーション、英語での交流、ディスカッション、散策などを楽しんだ。

⑤グローブ・シネマ Globe Cinema(国際短編映画祭)は、海外高校との交流の場として、継続して高校ホームページに掲載されている。

⑥NYの高校生とのブログの画像による交流 国内一般生が多いレベルの英語の授業の一環として実施、画像についてお互いに感想を記し合って交流している。

⑦探究学習や主体的・対話的で深い学び

各教科において自主的に行われている探究学習など主体的・対話的で深い学びの実施状況を調査して一覧にまとめている。この一覧上だけでも、1年生30、2年生37、3年生39と多数の授業実践が展開されている。全校の教員で、教科を越えた共有を行っている。

C ; ICUHS グローバルスタディネットワークの設立

SGH 活動を通じて I C U H S グローバルスタディネットワークが着実に形作られてきている。今年度の SGH 講演会や SGH 学習発表会で実施されたプレゼンテーションにも卒業生や卒業生保護者の協力があり、卒業生からの企画の申し出なども多くある。

I C U 高校卒業・関連の教育関係者・教職志望者のつどいである「教え人フォーラム」は、今年も回を重ね、ICU 高校の教育実践、とくにグローバル教育の知見を交流する有意義なつどいとなっている。米国スタンフォード大学教員の星友啓氏（卒業生）が世話人をつとめる。

7月8日（日）13:00-16:30 第6回「教育の未来／言語喪失」参加者 25名

12月23日（日）13:00-17:00 第7回「教育の今とこれから」参加者 30名

（3）課題研究以外の研究開発

A ; 学問的スキルとしての外国語教育

2 学年英語授業において、AP English Literature and Composition を実施している。加えて、前記 4) ⑤ ⑥⑦のような取り組みの工夫をしている。特に学年度末の外国語授業では、多くの生徒がプレゼンテーションを行っている。

B ; ライティングセンターによる論文作成指導

引き続きライティングセンターにより論文作成の指導を日英両語で行っている。本校卒業の大学院生らがチューターとして、生徒が執筆する論文やレポート、エッセイなどについて執筆途中で対話しながらアドバイスをを行う。なお、11月には「WRITING IN PROGRESS No.8」を発行した。

（4）グローバルリーダー育成に関する環境整備、教育課程課外の実施内容

- ① 2017 年度入試より、従来の帰国生徒入試外国籍者枠を拡大し、国内インターや留学による海外経験者を含めた国際生徒枠を一般入試の中に設けている。

7 目標の進捗状況、成果、評価

平成 26 年度指定校である本校 SGH に対する中間評価の結果は、「これまでの努力を継続することによって、研究開発のねらいの達成がおおむね可能と判断されるものの、併せて取り組み改善の努力も求められる。」というものであった。

また、中間評価講評は以下のとおりであった。

「〇多様かつ創意ある実践がなされている点が高く評価できる。〇研究開発課題と SGH としての取組、それ以外の取組の関連性がしっかりと整理されており、一貫性のある研究開発が進められている。〇計画に記載されている取組については、一定の成果を上げているが、外部のリソースに依存する傾向も強くみられる。今後、学校内での取組や通常の授業との連携などについて改善が望まれる。」

「外部のリソース依存傾向」「学校内での取組や通常の授業との連携」の二点の改善を図ることを念頭に、第4年次と第5年次のSGH校としての充実を期した。

(1) リベラルアーツへの招待について

1) SGH講演会は、学期の区切りに学年ごとに10回開催した。

生徒感想文では「偏見を持つことで、言葉が通じる相手ならともかく、言語の異なる相手では認識のちがいが生まれてもその認識を改めることが難しくなる。この話を聞いて、偏見を疑うことの重要性を感じた。ミリアム・アザールさん（シリア留学生）のような方が実際に講演してくださることでそのチャンスを得られると思った」「継続的な支援をするためには、その国の経済状況や需要に応じて、どのくらい、なにを渡す、または貸すのかを具体的に決めなければいけないということを実際に聞き、国際協力の現場に立つ人は語学力だけでなく、その国への深い理解と真摯な態度が必要なのだと改めて思った。同時に、外交官という仕事にすごく魅力を感じた。」などグローバル社会とかかわるうえで必要な態度変容を示すものが多くみられた。グローバルリーダーとして活躍する内外の専門家らの講演を重ねることで、グローバルリーダーとして必要な資質への気づきが着実に育ちつつある。

平成30年11月に全校生徒を対象に実施（580名回答）したSGHアンケート（Web実施）によれば、

■「海外のこと、国際関係のことについて関心を持つようになった」

そう思う 59.5%+ややそう思う 27.9%=87.4%と昨年の結果を大きく上回っている。

参考：昨年度調査：そう思う 49.2%+ややそう思う 33.9%=83.1%

■「スーパーグローバルハイスクールの企画、行事は自分にとって意味があると思う」

そう思う 61.2%+ややそう思う 29.3%=90.5%についても、昨年の結果を大きく上回っている。

参考：昨年度調査：そう思う 33.3%+ややそう思う 41.0%=74.3%

後者の設問に対する1年生の回答を抽出すると、97.9%が「そう思う」「ややそう思う」と答えている。入学当初から、SGHプログラムに対して高い期待感をもって本校に進学した1年生の姿が目につく。SGHスタディツアーや学習発表会を重ねるとともに、SGHプログラムを自らの成長の契機としようという強い意欲を感じる。

2) 外国語科では、1年生 EWW 個人プレゼンテーション「What the world needs –individual TED talks- いま、世界に必要なもの」、1年生 ELA Global Issues Poster presentation、2年生 ELA PECHAKUCHA presentations with Chromebooks、ニューヨークの高校とのブログを通じた交流やGlobe Cinemaなど、各自の英語レベルに応じた有意義な学習プログラムが提供されるよう、カリキュラムが年々整備されている。各教員が自主的にグローバルな資質を育成する授業計画を提案するような従来の雰囲気に加えて、それ

らを教科教育共通のスキルとして共有しようという機運が高まってきている。この点は、SGH 中間評価において指摘を受けた事項「通常の授業との連携」という課題に対する対応である。生徒らもグローバル化する世界において必須のコミュニケーションツールである英語を使いつつ、学ぶ楽しみやチャレンジを日々味わっている。

3) 課題解決学習に必要な訓練をする Global Leaders Boot Camp は3日間の厳しい体験となるにもかかわらず参加希望者が年々増え、年二回の実施が完全に定着している。さらに若手の教員が希望してキャンプに加わり貴重な経験をしている。教員の中にSGHのめざす方向が受け入れられていることのあらわれである。これは、SGH 中間評価において指摘を受けた事項「外部リソースへの依存」という課題への対応である。校内に、SGH を担う教員に必要な資質が養成されているといえる。

4) 教科学習において行われている主体的・対話的で深い学びや探究型の学習についてまとめた一覧を平成28年度より作成している。これは、SGH 中間評価において指摘を受けた事項「通常の授業との連携」という課題に対する対応である。各教科から報告を受けた学習は、1年生30、2年生37、3年生39を数える。学習者主体で学習期間の長い深い学びが、さまざまな授業で展開されている。各教科、各教員が世界中から集う帰国生徒とともに授業や学びを構築する上で工夫を重ねてきた多くの実践例が、校内でますます共有され、本校の共有財産となるよう今後も調査・共有を積み重ねていきたい。

平成30年11月に全校生徒を対象に実施(580名回答)したSGHアンケート(Web実施)によれば、

■「本校には世界に目を向け考えることのできる機会やプログラムがある」

そう思う 61.6%+ややそう思う 29.7%=91.3%

SGH 課題研究講座やスタディツアーに参加する生徒は全校生徒の一部にすぎないが、この設問に対してきわめて多くの生徒が肯定的に回答している。全校への波及を目図り行われているSGH講演会やSGH学習発表会などの効果はもとより、本校教育の中核である教科学習も含めて、本校のSGHプログラムが互いに関連をもったものとして全校生徒の中に広く浸透していることがわかる。

5) 9月1日に実施された全校の教職員研修会において、岡村郁子首都大学東京国際センター准教授による「帰国生のグローバルな能力とは」と題した講演を伺った。また、町田 健一前北陸学院大学学長・元国際基督教大学教授からは、「日本の教育改革を超えたICUHSの目指す教育」と題して学習指導要領改訂と教員養成制度改革、キリスト教学校としてのカリキュラム改革について講演を伺った。

この研修は、SGH 中間評価において指摘を受けた事項「外部リソースへの依存」という課題に対応するための重要な契機となった。

この研修の目的は以下の2点である。

1. SGH の本校の研究開発野課題である「帰国生と国内生の相互理解教育」について教員全員での意見交

換をすること

2. 教員が、主体的・対話的で深い学びを自分の授業に取り入れる際の、単一の教科を超えた視点を持ち、複数の教科が横断的・総合的にかかわるカリキュラムの開発に向けた下地を作ること

短い時間ではあったがこの研修会の意義は大きかった。今後の学校運営の方針を定めていくためにも、この機会に得た知見と、示された意見を活かしていきたい。

(2) SGH課題研究講座について

今年度は53名の講座選択希望者が登録した。生徒がそれぞれの興味関心から設定した視点で問いをたて、リサーチを重ね、議論しながら考えをまとめることができたので課題研究講座の目標は達成できた。本校生徒のプレゼンテーション能力は期待以上のものがあるが、各教科における日頃の実践の成果と考えられる。

また、以前は非常勤講師を委嘱して本講座を運営していたが、SGH中間評価において指摘を受けた事項「外部リソースへの依存」という課題に対応するために、運営の責任を本校教諭（地歴公民）にゆだね、さらに東京学芸大学から Datta Shammi 准教授を教育顧問として招聘し、さらに同大学教職大学院に所属する現職教員（広島県立高等学校教諭）を研修生として迎えることで、指導体制を充実させつつ外部評価を受けた。これにより、生徒の深い学びを支える十全な体制が整備されたと考える。

さらに課題研究の成果を全校で共有するために、11月28日にSGH学習発表会を行った。これは、SGH中間評価において指摘を受けた「学校内での取組」という課題に関する改善である。生徒の感想文によれば、「今までグローバル化とは、単に「人や物が世界中にまわること」だと思っていた。しかし今回たくさんのプレゼンを聞いて「グローバル」（化）とは様々な考え方や宗教が入り混じって、時には衝突し、時には合併していくことで、より様々な肝要な考え方が生まれていくことだと思った。私たちは多文化と触れ合う中で、多文化を理解するだけでなく、良いことを吸収し、自分の価値観の形成に役立てたい。」など、グローバルリーダーとしての資質形成につながる重要な示唆を得た機会となったことがわかる。その後、生徒によるキャリア甲子園2017やWorld Scholar's Cupへの挑戦、SGH校である渋谷教育学園渋谷高等学校の招待によるWater is Life 2018への参加などという具体的行動が続いている。

(3) スタディツアー等について

ベトナムやエチオピアへのスタディツアーは、観光旅行とは全く異なる課題研究に即した意義のある旅行となり、生徒の感想には異文化に出会った衝撃が現れている。コロンビア大学スタディツアーでは著名な海外大学のレベルの高い教育にふれて大いに刺激を受けることが出来た。海外大学進学を視野に入れている生徒がこれまで以上に具体的なイメージを持つことができるようになったという効果もあつ

た。

参加した生徒の感想文には、「多文化共生とは、お互いの文化や考え方を理解しあい、尊重しながらも、しっかりと自分の意見も周りに伝え、双方向のコミュニケーションがとりあえる環境であることだと思った。誰もが自分の個性を表現しながら、様々な意見交換をし学び合い、お互いのちがいを尊重しながらすごしていける環境がグローバルなのではないかと、私は思った。」（アジア学院）、「インターナショナルとグローバリズムで違う点を考えたとき、私は、インターナショナルは違いを理解・受け入れることであり、グローバリズムは共通点を分かち合うことだと思っている。」（GLBC）など、グローバルリーダーとしての資質形成につながる重要な経験や考察が述べられている。

さらに、他の SGH、SSH 校からの誘いで参加したプログラムとして、国際共同課題研究インドネシア海外研修がある。2019年2月11日から2月17日に、SSHに取り組んでいる立命館慶祥高等学校、市立札幌開成中等教育学校、北海道札幌藻岩高等学校との国際共同課題研究の研修に連携校として招待を受け、現地の高校生と共に地学、地震、火山に関するリサーチおよびプレゼンテーションを行った。本校2、3年生3名が参加し、理科の黒澤教諭が引率した。国内外の高校生との共同研究を行ったこと、特に理系の分野でのグローバルな学習を体験する機会を得た意義は大きい。本研修参加者は、ジョグジャカルタ郊外のムラビ山実地調査と地震被災者向け仮設住宅を見学する機会を得た。日本と同様に自然災害の多発するインドネシアにおいて、地震や津波、火山噴火について見聞を広め、防災と減災のための取り組みを学んだことで、持続的な社会の安全構築へ向けた課題意識と研究手法を考究する端緒となった。地球規模の課題に出会う契機となったことと考える。

（4）アンケート調査結果

平成30年11月に全校生徒を対象にアンケート調査（Web実施）を行い、SGH事業に対する生徒の意識を調査した（580名回答）。主な結果を以下に挙げる。数値は、「そう思う」と「ややそう思う」の合計（%）である。なお、（ ）内は昨年度の調査結果である。

- 「異なる文化との出会いは楽しいと思う」96.2%（92.2%）
- 「将来は国際的なことに係る分野で活躍したいと思うようになった」80.5%（74.1%）
- 「グローバルな社会が抱える問題の解決の努力をしたいと考えるようになった」84.8%（72.1%）

最も肯定的な回答が高い割合であられた調査項目は、「異文化との出会いは楽しい」96.2%（92.2%）であった。これは昨年度同様に、われわれの予測をはるかに上回る高い数値である。「楽しい」という前向きな気持ちを高めつつ、学びを深め、実践へと広げる、多文化共生実現に向けたサイクルを教育活動のなかに組み込む礎として、この回答を大切に考えたい。

さらに、「国際的分野での活躍」や「海外滞在し勤務」や「国際機関での勤務」などに強い意欲を持つ生徒が育っていることも確認できている。昨年度同様、「海外大学への進学」については、肯定的な回答が45.2%（41.1%）にとどまるが、「大学入学後の海外留学」については、81.0%（74.4%）が意欲

的な回答を行っている。この設問に対する3年生の回答を抽出すると、85.2%が「そう思う」「ややそう思う」と答えている。大学進学を目前に控えた彼らが、SGHプログラムを通してグローバルな感覚や志向性を強め、数年後の自分の現実の姿としてきわめて現実味をもって海外留学を志していると分析できる。

8 5年間の研究開発を終えて

(1) 教育課程の研究開発の状況について

本校は平成26年度のSGH校としての指定以来、SGHプログラムの開発・実施を軸に校内の教育プログラムの精査や改善を進めてきた。1978年の開校以来、帰国生徒の受け入れを主たる目的として帰国生徒とともに40年間歩んできた本校は、帰国生徒が海外での生活や学びから持ちかえるニーズを土台に学校づくりを進めてきた。40年間にわたって、帰国生が抱える現実が先行し、それに必死で対応する過程で形づくられてきたカリキュラムや学校文化などであるが、実はそれらが先進的であり、新しいグローバル世界を切り開く英知を持った人間を育てるのにふさわしいものであることが、卒業生の活躍や本校への期待の高さにより立証されつつある。いよいよSGH最終年次を終えるので、SGH校として得た知見を整理し、SGH後の学校のカリキュラムにいかにかそれらを定着させていくか、次年度以降の第一の課題である。

平成30年11月に実施した教員対象アンケート（34名回答）では、「SGH終了後の課題」（複数回答可）として、「新カリキュラムへの組み入れ」（10名）、「総合学習の見直し」（13名）、「探究的学習の充実」（16名）、「教科横断的授業実践」（10名）等が回答されている。学習指導要領改訂を受けた新教育課程編成の話し合いでも、上に列挙した方向性を目指す気運はこれまでになく高まっている。

本校が与えられている使命を常に確認しつつ、目標とすべき学力観や資質能力についての議論を深めながら、持続可能なカリキュラムを学校レベル、また授業レベルで構築してゆく。すでに、3年生「自由研究講座」などにおいて複数教科の教員による共同の授業開発が始まっている。SGH課題研究講座がこのような方向性のパイロットにあたるものであるので、その実践を継承しつつ、指導法や評価のあり方についても検討を重ねていかねばならない。SGH課題研究講座のこれまでの担当者が、重要なリソースパーソンになる。

(2) 高大接続の状況について

平成30年11月に実施した教員対象アンケート（34名回答）では、「5年間のSGHによる変化」（複数回答可）について12名の教員が、「大学をはじめ、外部機関との連携強化」を選択している。同一学校法人のもとにある国際基督教大学とは、従来から指定校推薦制度によって結ばれていたが、SGH5年間

にそのきずなはさらに強化された。SGUであるICUと、同じ使命と理想を掲げつつ、教育実践を重ね合わせるようにSGH5年間の展開された。さらに東京外国語大学は、近隣にある国立大学として本校生徒の進学先としても人気がある。毎年、定期的に教員をお迎えして講演を聞くことができた。これにより、生徒の外国語教育や地域研究への興味関心が惹起されてきた。

国際基督教大学との連携という点では、本校3年生が進路の決定した冬学期に大学授業の聴講を体験できるしくみの構築がある。単位認定を受ける段階までは進展していないが、大学の高度な学びの世界を先取りする機会として、さらに定着を図りたい。

教員対象アンケートでは、「SGH終了後の課題」（複数回答可）として、13名が「ICUとの連携強化」を選択している。大学教養学部長やアドミッションズ・センター長が定期的に高校に来校し、大学教育について説明を伺う機会を得ている。高校と大学の双方の教育理念や教育内容をすり合わせながら、高大にとって互恵的で継続的な関係を深めていく。

（3） 生徒の変化について

毎年、全校生徒を対象に実施を重ねてきた SGH アンケート調査を経年変化で比較することにより、SGH プログラムの成熟と生徒の間への浸透、さらに生徒の変容を確認できる。とくに、平成 26 年度 SGH 指定の後、SGH プログラムの展開や広報による周知の後に入学した平成 27 年度、28 年度入学生について、このことが指摘できる。

平成 30 年 11 月に行った全校生徒対象のアンケート調査（Web 実施）と平成 28 年度実施のアンケートの結果を比較する。数値は、「そう思う」と「ややそう思う」の合計（%）である。

■「グローバルな社会がかかえる問題の解決の努力をしたいと考えるようになった」

平成 30 年：84.8% ←平成 28 年：69.7%

■「グローバルな問題をグループで考えることができて良かった」

平成 30 年：89.1% ←平成 28 年：61.9%

どちらの設問に対しても、明らかに肯定的な回答が大幅に増加している。SGH3 年次から、課題研究講座を履修した生徒やスタディツアーに参加した生徒だけのグローバルリーダーシップ育成ではなく、すべての生徒の資質育成を図るための改善を試みた。体験を共有する試みとしての学習発表会や少人数でのプレゼンテーション、さらにホームルームでの報告と共有である。これらが有効であった。もちろん、後者の調査結果については、学習発表会のプログラムや当日の進行が整備されたことも要因として考えられるが、これらは、全校生徒が発信する経験と聞く経験と受けとめ交流しあう経験を同時に三重に行う形式であり、生徒のよりよい世界をめざす意欲や情熱が、生徒から生徒へ伝達されまた生徒相互間で交流しあうことで、高揚し深まったと考える。今後は、これらの意欲の深まりを持続していくための校内プログラムを開発しつつ、校外での活動を校内で発信できる恒常的な場の設定が課題であると考えている。

(4) 教員の変化について

平成30年11月に実施した教員対象アンケート（34名回答）では、「5年間のSGHによる変化」について、「生徒達の学習機会の拡大（17名）」、「生徒達の問題関心・意欲の変化」（9名）、「卒業生とのネットワークの形成」（11名）、「大学を初め、外部機関との連携強化」（12名）などが回答として選択されている。他方で「SGHが始まってから就職したのでよくわからない」という回答も9名あった。創立40周年を迎えた本校では、教職員の世代交代が進んでいる。SGH期間中に就任した若い教職員にとり、SGHに取り組む本校の現在の姿が当たり前のものであり、今後ますます発展させていくべき出発点として認識されているのであれば、今後のグローバル教育プログラムの充実も心強い。

ただし、SGHの5年間は手探りでプログラムをつくりながら走る試行錯誤の日々であった。教員集団また個別の教員は相当の注力により、プログラムや学びをつくりあげてきた。教員の注力と生徒の学びの深まりのバランスについては、検証の視点のひとつとして重視されるべきであろう。もちろん、SGHにより教科教育や学校の諸活動全般の活性化がはかられたことは、言うを俟たない。

教員対象アンケートでは、「SGH後も伸ばしていきたいと思うICU高校生の特性」（自由回答）として、「挑戦力、多様な背景に関する理解力、問題発掘力、行動力、発信力、素直な他者受容力、感受性、学習意欲、外へ目を向ける力、プレゼンテーション力、表現力、相互学習力、考えることを楽しむ力、自ら感じ、考え、動き、共有する力、じっくりと本を読み考察していく力、知的好奇心を発揮する力、学力、リーダーシップ、自由な発想、他者の価値観を尊重する力」などが挙げられている。教科教育の充実と相互連携を図りながら、学力の充実に加えてグローバル市民として必要な資質能力は何なのか、帰国生徒が大半を占める本校において、今後も考察を深め発信していきたい。

(5) 学校における他の要素の変化について

第一に、SGHの5年間で、帰国生受け入れ校である本校にとり、帰国生教育のあり方を再び問う機会となったことが確認できる。帰国生受け入れやグローバル教育という点で、本校と肩を並べる首都圏の私学が多数SGH校として指定を受けたことから、他校の実践に刺激を受けつつ、「帰国生受け入れ」「国際基督教大学の併設校」という本校の強みを大切にしつつ、いかにして社会に働きかけ、貢献していくかという課題意識を抱くこととなった。それは、帰国生受け入れ校で帰国生受け入れ教育を手探りで模索してきた教員集団にとり、過去からの蓄積を継承しながら、本校ならではの帰国生教育の姿を構築する機会でもあった。その成果は、本校ライティングセンター文集「WRITING IN PROGRESS No.8」の充実、「教え人フォーラム」その他の研究会や講演会などにおける本校教員の研究発表の増加に顕著にあらわれている。後者については、とりまとめて一覧を作成している。

第二に、保護者との協同による学校の活性化が確認できる。ICU高校がSGH校であることに強い注目

をもって子女を入学させた保護者も多く、学校の教育内容に対する高い関心がやがて学校を応援する試みとしての父母の会「おやじの会」の設立につながった。父母の会メンバーによる光学機械メーカーとのコラボ「プロジェクターを組み立ててみよう」やハーバードビジネススクール竹内教授による特別講演など、今年度にはさまざまな実践が重ねられた。

第三に、留学生の定期的な受け入れが再開されたことが確認できる。従来から、留学生受け入れの枠組みは有していたが、諸般の事情により休止状態であった。SGH 指定を機にこれを再開した。ロータリーや AFS からの留学生に加えて、「アジア高校生架け橋プロジェクト」の留学生も受け入れている。

「アジア高校生架け橋プロジェクト」の留学生（女子）は、帰国にあたり、AFS リエゾンパーソンを通して次のようなメッセージを届けてくれた。「マレーシアでは同級生同士の関わりはどちらかというと嫉妬や競争心が前面に出るものだったが、貴校の生徒の皆様からいつも温かい言葉をかけていただいたことで、他者への尊重、思いやりという日本の価値観を学んだ」「自分に対する理解、他者との接し方、異なる文化への望み方、グローバルな問題への関心など、多くの面で成長できたことに感謝」。このようなメッセージに耳を傾け心を寄せる経験は、グローバル市民の資質育成にはきわめて意味のあることと考える。

帰国生徒に加えて国際家庭の生徒、さらに世界各地からの留学生と、校内の生徒の様相もますます多様化しており、多様性の中での学びを掲げる本校としては本来あるべき状況が出現している。受け入れにあたる教職員もこの状況に柔軟に対応することで、与えられるものも多いと考える。教員対象アンケートでは、「SGH 終了後の課題」（複数回答可）として、7名が「海外校との提携、姉妹校としての協定、交換留学制度の確立」をあげている。今後ますます進展を図りたい方向である。

（6）課題や問題点について

本校は、1978 年の創立以来「平和」「人権」を使命に掲げて歩んできた。SGH の 5 年間には、それらと重なり合う「多文化共生」という課題に深く集中的に取り組む機会が与えられた。帰国生徒と一般生徒の相互理解や融和を企図してきた本校は、今後も「平和」「人権」に加えて「多文化共生への社会貢献」を目指した教育実践を重ねていきたい。教科教育だけでなく、特別活動やキリスト教教育活動に、「多文化共生」という課題を意識的に加えていく。SGH 指定を記念した講演会などを実施することで、SGH 事業によって与えられた志しを教育活動の基礎に据える。

第二として、バイリンガルで実施された課題研究講座やその発表会のように帰国生徒の体験、外国語力を活かす取組ができた。帰国生徒の持つ潜在力がさらに発揮されるような取組を本校のプログラムの中で開発し普及に努めたい。

第三として、教科学習とグローバル教育プログラムとの往還を考究したい。教科学習がグローバル教育を支え、グローバル教育が教科学習を促進する、そのようなあり方を追究したい。具体的には、教育課程編成と「総合的な探究の時間」再構成に際して、教科の知見や視点を持ち寄り、本校独自のカリキ

ュラム構築を目指したい。

(7) 今後の持続可能性について

現在のSGHプログラムを経験した在校生・卒業生の満足度の高さから、グローバル教育プログラムは本校の教育に欠かせない一部分となっている。さらに、プログラム実施に際しても全校で取り組む体制ができつつあると考えている。管理機関である学校法人国際基督教大学および国際基督教大学とも連携を強めつつ、必要な予算措置を受けながら、SGH5年間に展開したプログラムを継続する。

課題研究講座は、自由研究講座として平成31年度も継続実施する。あわせて学習発表会も継続実施する。新教育課程編成の際に、カリキュラムの一部として課題研究を構成することを目指す。

SGH講演会は、回数を絞りつつ学年会主導で、より生徒の興味関心に即した講師選定のもと継続実施する。マルチイベント方式により、生徒が自らの希望により受講できる講演を選べる方法も検討する。

スタディツアーは、現在実施しているもののうち、エチオピアスタディツアーを除き継続実施とする。

以 上

<添付資料>

- ① 国際基督教大学高等学校平成30年度スーパーグローバルハイスクール研究報告書
- ② ライティングセンター文集「WRITING IN PROGRESS No.8」